ここにコロニカ・メヒカーナ〔メシーカ人のクロニカ〕が始まる。この新世界に住むメシーカ人であるインディオたちの血統と家系、当地ヌエバ・エスパーニャへの到来について、すなわち、彼らがメシコ・テヌチティトラン〔メシコ=テノチティトラン〕市に到達したころのこと、そこへの定住、彼らが成し遂げた征服について扱う。彼らはテヌチティトランと呼ばれるその場所に現在も生活し、居住している。

第１章　彼らの到来、この新世界にたどり着くまでに過ごした年月について、以下に述べることとしたい[1]。さて、彼ら自身が地元の人々を説得し、彼らの居場所が手狭であったことから、彼らが崇拝していた神であるウィツィロポチトリ、ケツァルコアトル、トラロカテウトル[2]らは、取り決めを行い、この後に記すような事柄を彼らに告げた。古のメシーカ人の到来、その彼らがやって来る以前の土地、昔の棲家は、現在ではチコモストク、すなわち７つの深い洞窟の家と呼ばれている。それはアストラン[3]、つまりは鷺の棲家[4]という別名も持っている。かの地の湖に位置するアストランには、彼らのク〔祠〕があり、彼らの偶像で神であるウィツィロポチトリの神殿があった。この神は、カスティーリャの薔薇のように大きな、１バラ〔約 80 ㎝〕を超えるほどの長さがある茎の付いた白い花を手に持っていた。彼らはその花をアスタショチトル[5]と呼び、芳しい香りのする花であった[6]。その昔、彼らはアストラントラカ〔アストラン人〕を自称し、他の人々からはアステカ・メシティン[7]と呼ばれていた。このメシティンという名称はメシーカ人を意味するのだが、より正確に言えば[8]、葡萄から出る泉というのがメシ、マゲ〔マ

---

[1] 原注１　以下、次のように読める文面が傍線で消されている。「こうして、[…] の意思に従い、失われ持ち去られる［…］我々の敵である悪魔たちが」。
[2] トラロカンテオトル（トラロカンの神）。
[3] 原注２　ボトゥリーニ／ベイティアの注記〔以下、B/V と表記〕　「アストランの意味」
[4] 原注３　以下、次のように読める文面が傍線で消されている。「スペイン、フランスなどというのと同様にこれが彼らの名称だった。スペインであれば剣を紋章とし、フランスであればユリの花〔フルール・ドゥ・リス〕といったようなものである。」
[5] アスタショチトル（aztaxóchitl）「白い花」。
[6] 原注４　以下、次のように読める文面が傍線で消されている。「アストランという名称、名前を持っていることそのままに」。
[7] 原注５　B/V　「メシティンはリュウゼツラン（maguey）の派生語」。
[8] 原注６　以下、次のように読める文面が傍線で消されている。「〔…〕のため、メシティを理解するというのは、言わば〔…〕を理解することである」。

ゲイ、リュウゼツラン〕から泉が出るというようなことである[9]。それゆえ、彼らは現在もメシーカ人と呼ばれ、かつては、メシーカ・チチメカ（メシーカ人、山岳人、山の人間）という名であった[10]。現在、この語は当地〔メキシコ〕の名称であり、メシコ・テヌチティトラン市の名称となっている[11]。当市へたどり着いたころ、彼らは、近隣の住民で今では同市から 2 レグア離れたクルワカンの先住民インディオに敗走して逃げてきていた。悪魔（デモニオ）ウィツィロポチトリに説得され、彼らは現在のメシコ・テヌチティトランとなっている同市にたどり着いたのだった。彼らがメシコ湖の真ん中に達したとき、そこには陸地があり、そこには岩があって、その上には大きなウチワサボテンがあった。藤（とう）や葦の筏でやって来たとき、彼らはその岩とウチワサボテンがある場所を見つけた。そして、その足元には蟻の巣があった。さらに、そのウチワサボテンの上には、一匹の蛇を食い引きちぎっている鷲がいたとされる。こういったわけで、彼らはその名称および紋章として、ウチワサボテンと鷲[12]、つまりはテヌチカおよびテヌチティトランという現在の名称を定めたのであった。同市にたどり着くまでに、彼らは数々の[13]土地や山々、湖や川を歩いて通ってきた。まず彼らが通ってきたのは、今日ではチチメカ人が住んでいる土地や山々で、サンクタ・バルボラ〔サンタ・バルバラ？〕、ミナス・デ・サント・アンドレス・チャルチウィテス、グアダラシャラ〔グアダラハラ〕、シュチピラ、そしてメチュワカン〔ミチョアカン〕に至る地域で、これ以外にも様々な地方や町が含まれる。彼らがたどり着いた場所では、そこが肥沃で山や水が豊富な場所だと思われたならば、40 年、あるいは 30 年、20 年、10 年といった期間、場合によっては 3 年、2 年、1 年といった期間、そこに住み着いた。極端な場合は 20 日間ということもあった。〔そうした場所に着くと〕彼らは、彼らの神ウィツィロポチトリの命令に従って小屋を建てた。ウィツィロポチトリは彼らに語りかけ、彼らもそれに応答した。また、ウィツィロポチトリは彼らに命じて、

---

[9] 原注 7　以下、次のように読める文面が傍線で消されている。「ワインの元となる果実で、それをつくるようなこと」。
[10] 原注 8　B/V　「81+77+158」。
[11] 原注 9　〔B/V？〕　「[…] メシコ・テヌチティトランの [...] 歩いてやってきた」。
[12] 訳注 3　正しくは、テトル（tetl, 石）とノチトリ（nochtli, ウチワサボテン）の組み合わせが、テノチカ（tenochca）、テノチティトラン（tenochtitlan）の語源と言える。
[13] 原注　10　B/V　N.B.

しばしば次のように言うのだった[14]。「メシーカ人よ、先へ進め。我々はかの地に到着しつつある」。つまり〔ナワトル語で〕「あと少し歩いていくぞ、メシーカの民よ」と[15]。また、彼らはいつも食糧を持ち運んでいて、女がそれを担いでいた。子どもと老人、若者たちは、鹿、野兎、兎、鼠、蛇を運び、親や女たちあるいは子どもたちに食料として与えていた。持ち運んでいた食べ物とは、トウモロコシ、フリソル[16]、カボチャ、チレ〔トウガラシ〕、シトマテ〔トマト〕、ミルトマテ[17]であった。彼らは上述のように留まって居住した地でこれらの種を播いて収穫をしていた。また、チアン〔チア〕とワウトリ〔アマランサス〕は軽量であるため、子どもたちが担いでいた。とはいえ、彼らがたどり着いた場所でなによりも最初に作ったのは、彼らの偶像で神であるウィツィロポチトリのクすなわち神殿であった。彼らは大人数であったので7つの地区に分かれて住み、それぞれの地区はその地区の神の名で呼ばれていた。すなわち、ケツァルコアトル、ショコモとマトラ、ショチケツァルとチチティク、セントゥトル〔センテオトルまたはシンテオトル〕とピルツィンテウクトリ、メテウトル〔メテオトル〕とテスカトリプカ〔テスカトリポカ〕、ミクトランテウクトリ〔ミクトランテクトリ〕とトラマカスキ、その他の神々といった具合である。それぞれの地区には特定の神が与えられていたものの、彼らは別の神も連れて歩いていた。また、インディオたちに特によく話しかけていたのは、ウィツィロポチトリ、トラソルテウトル、そしてミクトランテウクトリであった。1つめの地区はヨピカ、〔次は〕トラコチサルカといい、3つめの地区はウィツナワク、〔以下は〕シワテクパネカ、チャルメカ、トラカテクパネカといった。7つめの地区はイスキテカという名であった[18]。彼らがたどり着いた場所は不毛な土地であったが、生きた野兎を放ち、それらは増えていった。また、神々が進むよう彼らに命じた場所には、トウモロコシの穂を置いた

[14] 原注11　本文とは別の筆跡で、以下のような蔵書の記載がある。「この手書きの書、メシコの歴史は、フランシスコ・ペレス・デ・ペニャロサが所有するもので、私がフランシスコ・ベセーラ神父から1ペソ4トミンで購入したものである。ペニャロサ。」

[15] 原注12　“Ca ça[n] achitonca [oncan], matonenemican, mexi[c]a”（「あと少しの時間で、あそこ（に着くのだ）。メシーカ人よ、歩くのだ。」）

[16] フリホル豆。インゲン豆の一種。

[17] 「畑のトマト」の意で、現代ではトマテ・ベルデないしはトマティージョと呼ばれているホオズキ属の植物の果実。

[18] 原注13　「メシーカ人がたどり着いた場所の名称、そこに建てた神殿と偶像」

り、花を置いたり、畑から収穫したばかりのものを置いたりした。このようにして、彼らは徒歩でやってきて、作業をして偶像の家ないしは塔を作ったりしながら、クリアカンやシャリスコ〔ハリスコ〕、その他、数多くの地方や場所にたどり着いていった。それらの場所に彼らは名前を付けていったが、メチュアカンまでたどり着くと、そこに居を構えた。彼らは常に〔各地に〕末裔や子孫を残していった。さらに彼らはマリナルコにも到着した。まず、メチュアカンに着くと、男も女も大喜びで水と戯れた。そこは現在のパスクアロ〔パツクアロ〕である。同胞である残りのメシーカ人たちは、そこに多くの者たちが居残るのを見るや、彼らから肩布と下帯（マシュトリ）を無理やりに奪った。女たちからは、ウェイピル〔ウィピル〕と腰布を取り上げた。こうして男は恥部を覆い隠さずにいるようになり、女はゆったりとした上着、すなわち彼らの間でシクイリと呼ばれたビスカヤ風マントのようなものをやむなく着るようになった。そこは暑い場所であったことから、今日でも女たちはこれを身に着けている。男たちは、肩の部分に刺繍が入ったグエイピルのような服を着るようになった。彼らとともにそこに居残った長姉はマリナルショチといい、ウィツィロポチトリの姉を名乗っていた。彼女は、メチュアカン地方に残った者たちを慰めた後に、彼らとともに旅してきた。長老たちが彼女を運んできたのだが、彼らは寝ている彼女を置き去りにした。というのも、彼女には悪い癖があり、彼女の業を彼らに対して用い、多くの者たちを殺していたからである。すなわち、彼女が人を見つめると、次の日にはその人は亡くなっており、彼女が生きた心臓を喰らっていたのである。また、人を見つめることで、気づかれぬうちにその者のふくらはぎを食らったりもした。これは現在ではテヨロクアニ、テコツァナ、テイシュクエパニと呼ばれているもので、誰かを見ているとき、山や川がその人の目を惑わし、大きな動物や木、あるいはその他の恐ろしい幻影が見えるというものである。こうして彼女は眠っている人を寝床から担ぎ出したり、毒ヘビを呼び寄せて誰かを襲わせたりした。さらには、さらにはサソリ、ムカデ、毒グモなどの、様々な毒を持つ動物を呼び出して多くの者を苦しめ、たくさんの人を殺すのであった。彼女は妖術を使い、鳥や動物など望む姿になることができたのだった。このようなわけで、神ウィツィロポチトリはメシーカ人に彼女を同行させることを許さなかった。ウィツィロポチトリの姉であることを鼻にかけていたマリナルショチは、道中で寝ているところを置き

去りにされた。神〔ウィツィロポチトリ〕と長老たちは、眠っている彼女を置き去りにしたのである。トラマカスキ・ウィツィロポチトリは、このことについて、彼女をいつも担いで運んでいた長老たち――〔一人目は〕クアウトロンケツケという名の者、二人目はアショロア、三人目はトラマカスキ・クアウコアトルといい、四人目はオコカルツィンであった――に言った。「姉のマリナルショチが〔アストラン〕を出てからここに至るまで、あのような役目や役割を担うということは、我の責任でも本意でもないのだ。そもそも、この旅を命じたのは我であり、我の第一の務めは、戦争と武器、弓と矢なのである。盾を運ぶことが我の務めである。我の務め[19]は戦争である。我の胸元や頭部や腕などあらゆるところにそのことが見てとられよう。先にあるクニや人々のところへ、境界を越えて我は進んでゆき、あらゆる民族[20]をひとまとめに治めるのだ。戯言などではない。何よりもまず、我は戦争によって征服をし、貴重なエメラルド、黄金、羽飾りでできた家〔神殿〕を手に入れなければならぬのだ。ガラスのごとく透明な貴重なエメラルド、品がよく美しい色とりどりの貴重な羽細工でできた家に、貴重な羽をもつ様々な鳥類を飼い、そこには、色とりどりの貴重なトウモロコシ穂やカカオ豆があり、あらゆる種類の綿や織物に満ち溢れるようにするのだ。このことはすべからく実現される。というのも、これこそが我の役目であり、そのために旅をしてきたのだから。よいか、我が父たちよ。旅に必要となる食糧を用意せよ。我らが決心し住み着く場所は、この先にあるのだから。」こうして彼らは再び歩き始め、オコピピラと呼ばれる場所に到着したが、この場所には長くは留まらなかった。それから彼らはアカワルシンゴと呼ばれる場所に行った。そこでかなりの時間を過ごし、閏年(ビシエスト)[21]と呼ばれる年までそこに留まった。この閏年(ビシエスト)〔までの期間〕とは、一つの生、一定の期間が終わるまでのことで、イン・シウモルピリ[22]と呼ばれているものである。その年は、これら昔のメシーカ人の年の数え方によると、9 の数字と年の記号（チクナウィ・アカトル〔9=葦〕）によって表されるものであった。さて、

---

[19] 原注 14　人差し指を伸ばした手。
[20] 16 世紀のクロニカでは、原文の naciones は「民族」の意味で頻繁に用いられた。
[21] 西暦における閏年は 4 年に 1 度であるが、ここではメソアメリカ暦の 52 年の区切り（トシウモルピリアに該当する年）ことをこのように表現しているものと思われる。
[22] 原注 15　B/V　閏年、すなわち世紀の終わりの話をしているが、数字と年の記号が誤っている。閏年と呼ばれる年…イン・シウモルピリの部分に下線。

彼らはオコピピラとアカワルシンコを出ると、トナラン（太陽の場所）の領内にあるコアテペクと呼ばれる地域にたどりついた。

【訳：井上幸孝　2024/03/23】